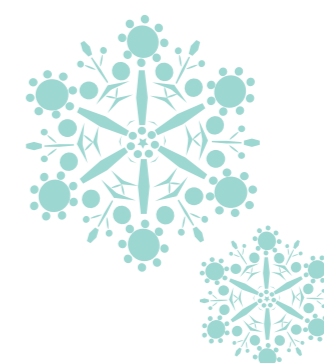




# 雪の大ぼうけん

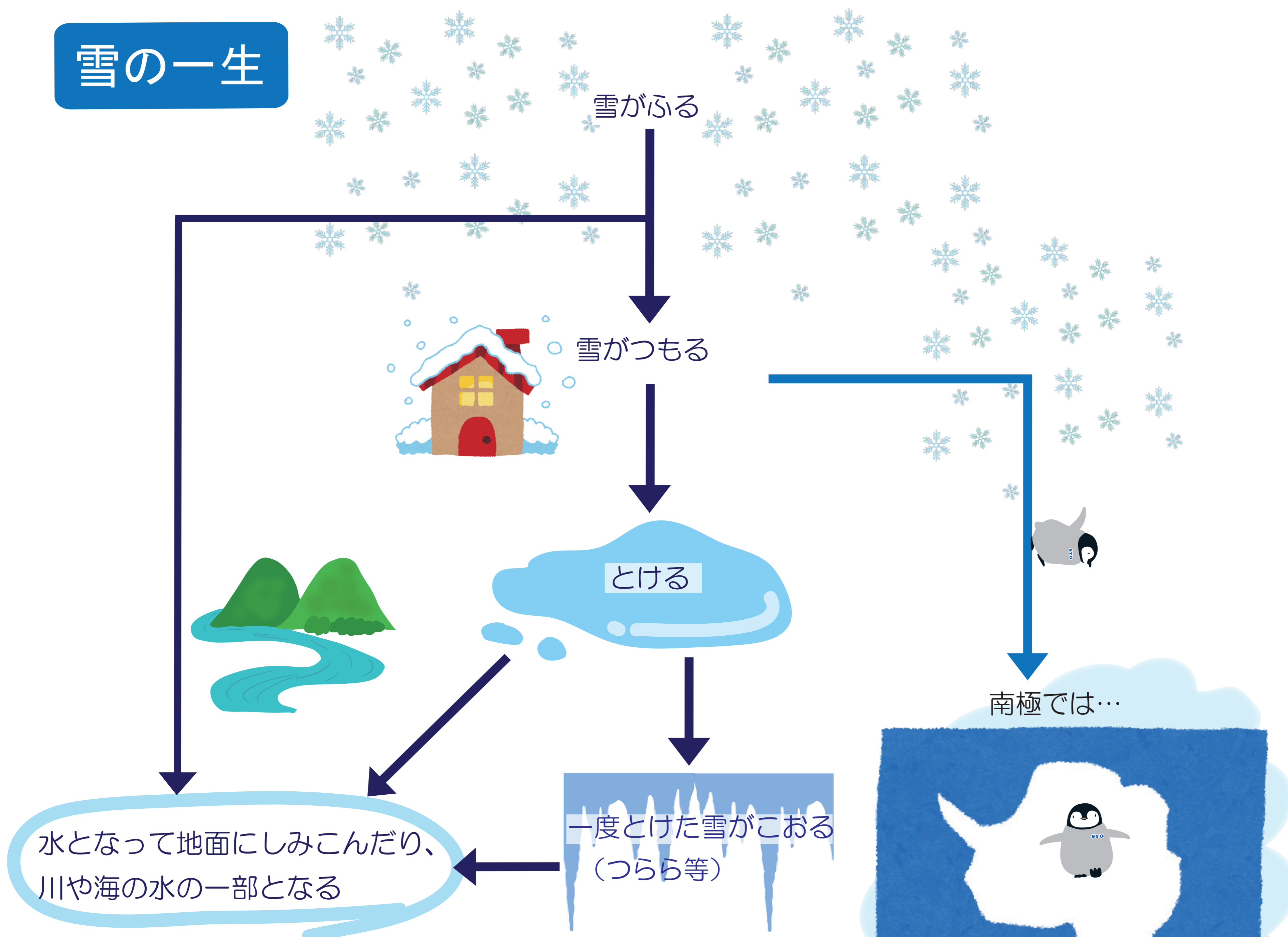


空気中の水蒸気が上空で冷やされてできた「雲」。その雲から、氷の結晶となって落ちてくる「雪」。雪は、気温と水分の量で形を変えます。大きな雪の結晶ができるのは気温が高く、水分の量が多いときです。

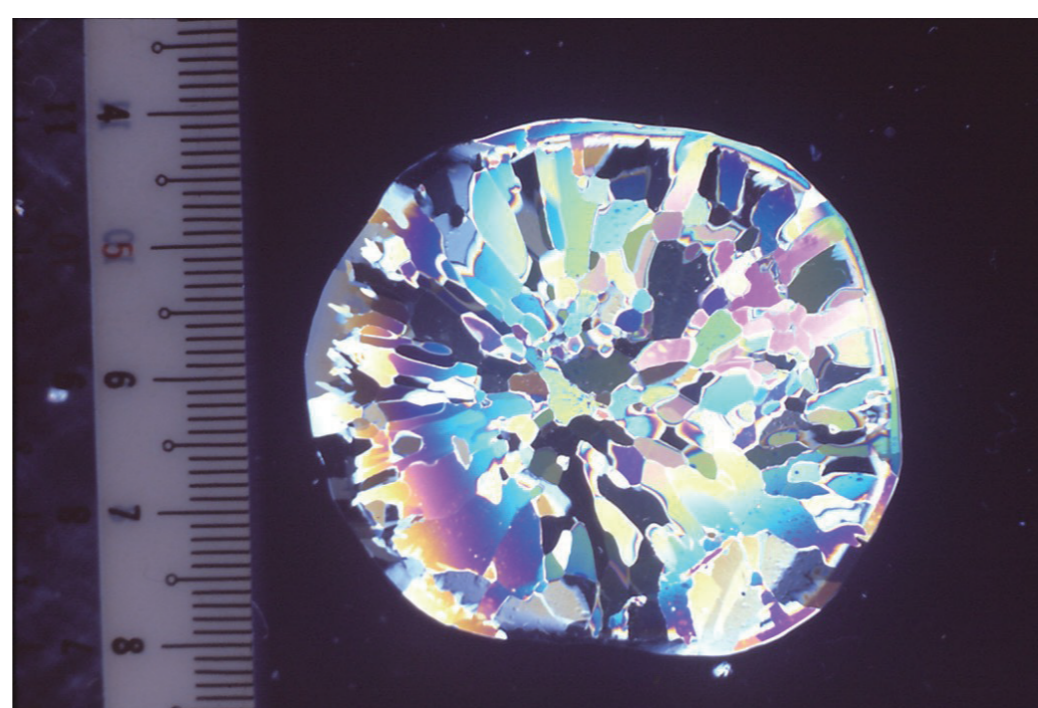
気温が0℃より高いとき、雪は一部がとけかかっている状態です。東京にふるのは、主にこのとけかかった雪で、結晶が大きいので、結晶どうしが次々とくっついて「ぼたん雪」などと呼ばれます。着ているコートに雪がたくさん付いて困ったという経験のある人も多いのではないのでしょうか。

気温がとても低いときは、水分が少なく、サラサラとした雪になります。南極の内陸では、気温が低く水分も少ないので、とても細かい氷晶(0.1~0.001 mm、ダイヤモンドダストと呼ばれます)がふります。氷晶やそれから成長してできた雪が積み重なり氷となって厚い氷床となるのです。

## 雪の一生



【北極の雪どけ】



【つららの顕微鏡写真】

つららを横にうすく切り、偏光顕微鏡で見たものです。



ふりつもった雪がつみかさなり、押しつぶされて、深さ50~100mで氷に変わっていきます。これが氷床になります。